

佐賀縣・長崎縣の裝飾古墳

SA

GA

KEN

NAGA

SAKI

KEN

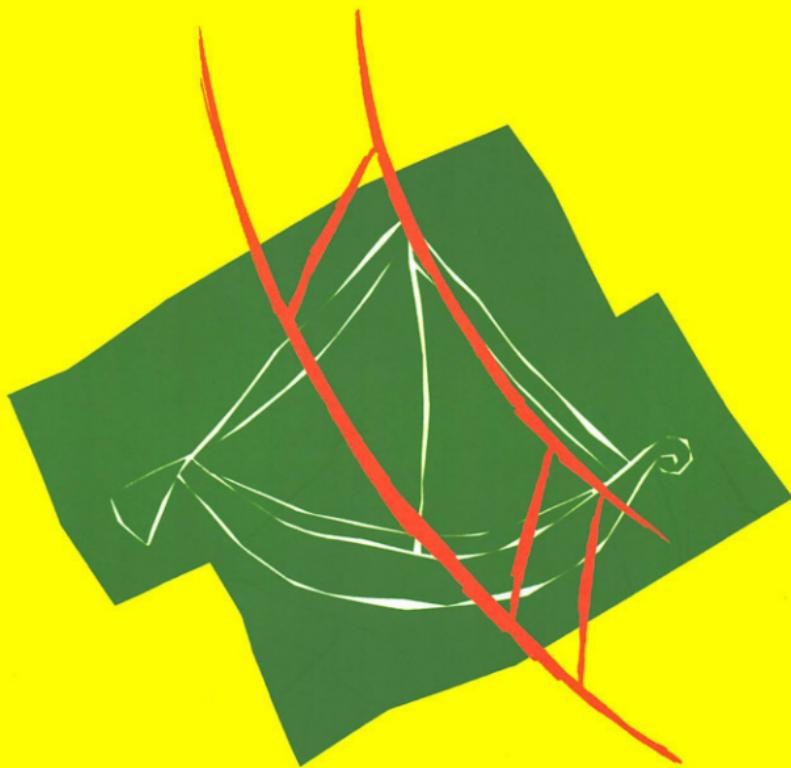
NO

SO

SHOKU

KO

FUN



平成10年度後期企画展

佐賀県・長崎県の装飾古墳

熊本県立 装飾古墳館



開催にあたって

熊本県立装飾古墳館では、平成7年度より企画展「全国の装飾古墳」を開催致しております。今回は、昨年の福岡県に続きまして、佐賀県・長崎県内の装飾古墳をご紹介します。

佐賀県は、筑後川流域に平野部が広がり、有明海の豊かな産物に恵まれた、豊潤な地として古来より栄えてきました。一方、長崎県は朝鮮半島に近い立地条件から、対外交渉の玄関口として重要な役割を担ってきました。

今回は、両県の地域性を踏まえ、かの地に華開いた装飾古墳を数々の副葬品や残された文様をとおしてご理解頂ければと考え、企画展示致しております。展示致しました先人の遺産から、往時の文化をしのんで頂ければ幸いです。

この企画展にあたり、多くの関係機関ならびに、関係諸氏にご協力頂きました。この紙面をお借りして、厚く御礼を申し上げます。

平成10年11月1日

熊本県立装飾古墳館長 桑原憲彰

目 次

開催にあたって	1
目 次	2
凡 例	2
佐賀県の装飾古墳	
I 筑後川中流域	3
佐賀県装飾古墳分布図	4
II 背振山南麓地域	8
III 天山山系地域	11
IV 杣島山山系地域	17
長崎県の装飾古墳	
I 有明海沿岸部域	33
長崎県装飾古墳分布図	34
II 壱岐の装飾古墳	38
参考文献	45
出品一覧	46
協力機関・協力者	46
付論『装飾古墳の絵画について』	
鯨の線刻画などを例に	49
国立本産大学校 立平進 助教授	
奥 付	56

凡例

印刷仕様

刊 型	A4版
(U) 数	56頁
組 版	写植印字(15級教科書体)
印 刷	オフセット印刷
製 版	スクリーン線220網印刷
用 紙 表紙	マットアート紙220g
本文	アート紙135kg
製 本	左無線綴じ
表面加工	マットPP

- 本書は、熊本県立装飾古墳館平成10年度後期企画展【全国の装飾古墳シリーズ4】『佐賀県・長崎県の装飾古墳』の展示図録です。
- 本図録の執筆・編集は本館学芸課の指導で、坂口圭太郎が担当しました。
- 本図録掲載の実測図等は関係機関や関係諸氏に資料提供をいただき本館で作製しました。
- この展示にあたって、氏名、機関名、関係機関や関係諸氏にご指導、ご協力いただきました。巻末に記し感謝の意を表します。

佐賀県の北側は脊振山系の山々によって限られ、南側は有明海に面した肥沃な佐賀平野が広がっています。

この地域では、まず佐賀平野において、石棺系装飾古墳が出現します。その後、筑後川流域の影響下、埴輪系の装飾古墳が遅れて出現します。一方、まったく系譜の異なる装飾古墳が有明海沿岸部で造られます。これらの多くは、格子文や斜格子文等の幾何学文様を装飾のテーマに線刻の技法を用いています。この他にも、放射状文や舟、人物等の装飾も見られます。

I 筑後川中流域の装飾古墳

筑後川流域は、菊池川流域と並ぶ九州における装飾古墳の大密集地であり、福岡県で確認されている装飾古墳のはば80%ほどが、この流域に認められるほどです。佐賀県中流域の3基の古墳も筑後川流域の最も西側を構成する一群と見ることができます。したがって石室の構造や装飾文様の在り方には共通する様相が多く認められます。

鳥栖市の装飾古墳

鳥栖市は佐賀県の東部に位置し、筑後川の豊かな水で潤された穀倉地帯です。この地方も古くは『基肄』と呼ばれ北部九州との交通の要衝にあたり栄えてきました。

とくに田代太田古墳の赤色顔料には、ベンガラ（酸化二鉄）が黒色顔料には炭素が、緑色顔料には海綿石が使われていたことが明らかにされています。

田代太田古墳 鳥栖市田代太田町字田代1370

笠頭山の南、上り山の南斜面に立地しています。

本古墳は直径約42メートル、高さ6メートルを測る円墳で、2段に墳丘が造られています。

石室は3室構造を持つ横穴式石室で全長は約9メートルあります。屍床と呼ばれる遺体の安置場所が後室に3体分、中室に2体分設けられています。

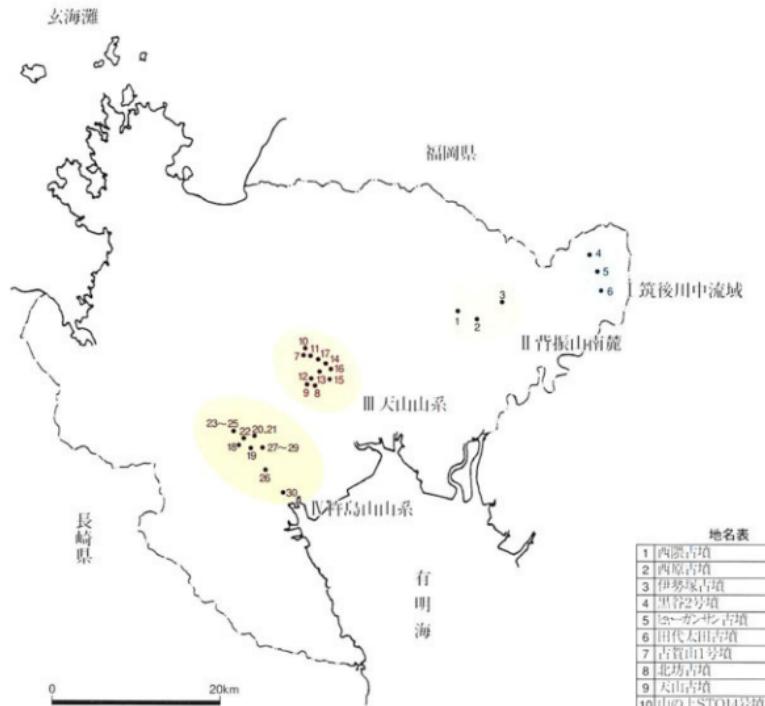
奥壁の装飾は全面に連続三角文を配置し、上段が下部から中段にかけては両手を掲げた人物2体と舟が、中段には同心円文と騎馬人物、渦巻文、脚を持つ円文等が描かれています。

下段右側には、4個の盾が描かれています。いずれも赤色と黒色と緑色、黄色の岩肌を利用して、鮮明に塗り分けられています。

右袖石には同心円文と狩をする騎馬人物が、左袖石には同心円文と舟に乗った人物、盾、高杯などが描かれています。また中室の右側壁には、死者を送るかのように舟が赤で描かれています。



田代太田古墳近景



地名表		国指定
1 西原古墳		未指定
2 西原古墳		未指定
3 伊勢崎古墳		未指定
4 黒谷2号墳		未指定
5 玉ヶ森古墳		未指定
6 田代久山古墳		未指定
7 吉賀山古墳		未指定
8 北坊古墳		未指定
9 天山古墳		未指定
10 山の上STO14号墳		未指定
11 清木古墳		未指定
12 穴太師古墳		未指定
13 坂井山古墳		未指定
14 鶴御前古墳		未指定
15 深底龍古墳		未指定
16 分財大古墳		未指定
17 糸ノ瀬1号墳		未指定
18 東福寺STO14号墳		未指定
19 永進古墳		未指定
20 笠井崎3号墳		未指定
21 笠井崎古墳		未指定
22 勇猛寺古墳		未指定
23 勇猛山1号墳		未指定
24 勇猛山2号墳		未指定
25 勇猛山5号墳		未指定
26 湯崎2号墳		未指定
27 姫山4号墳		未指定
28 姫山6号墳		未指定
29 姫山7号墳		未指定
30 龍王崎6号墳		未指定

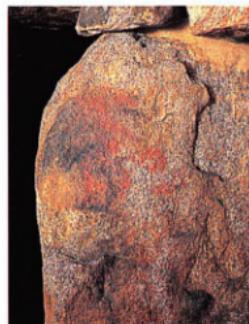
第1図佐賀県の装飾古墳分布図



石室



奥壁



玄室入口右袖石



中室右侧壁

田代太田古墳石室



玄室入口左袖石



出土品や石室構造から6世紀後半頃に造られたと考えられます。

ヒャーガンサン古墳 鳥栖市今町字八ツ並

鳥栖北部丘陵に広がる柿比遺跡群の北東部八ツ並遺跡の南方に突き出た丘陵の頂上部に位置しています。

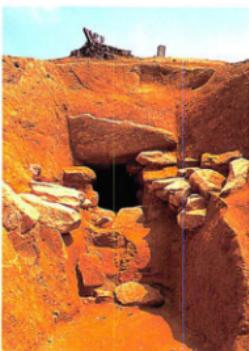
古墳は直径約20メートル、残存高2メートルを測る円墳です。石室は複室構造の横穴式石室で全長は約6メートル、玄室の長さ約2.8メートル、幅約2.2メートル、高さ約2.1メートル、前室の長さ約0.6メートル、幅約1.5メートル、高さ約1.4メートル、羨道部の長さ約1.4メートル、幅約1.4メートルを測ります。

装飾は玄室の奥壁に、中に十字を持つ円文や左右両側に2個づつの円文を赤色顔料を用いて描いています。他にも文様がありそうですが、現在、確認されていません。

石室構造から6世紀後半に築造されたと考えられています。



墳丘遠景



石室入口より



奥壁



基山町の装飾古墳

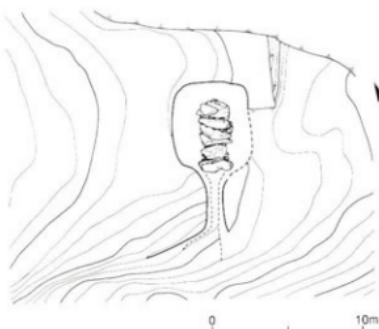
基山町は、鳥栖市の北、筑紫山地から延びる丘陵地にあり、古代には基肄駅が置かれ、交通の要衝として栄えたところです。

黒谷2号墳 三養基郡基山町大字宮浦字黒谷

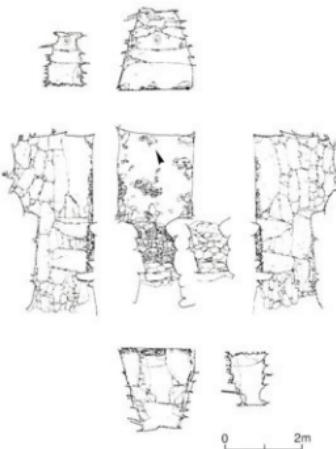
黒谷古墳群は脊振山系の契山から南東方向に延びる標高60～80メートルの丘陵上に立地します。総数で9基の古墳が確認されています。6世紀の後半から末頃にかけて築造されたと考えられます。出土した副葬品から7世紀末まで追葬が行われているようです。

2号墳の石室現存長は約6メートルで、玄室長2.33メートル、幅2メートルを測ります。

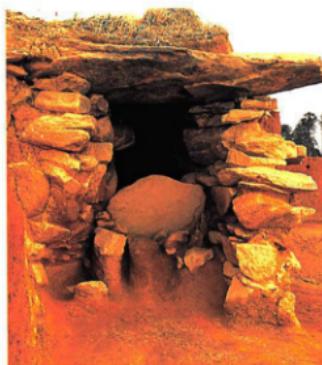
装飾は玄室奥壁中央に叩き垂めの技法を用いて外形約25センチメートルの同心円文を描いています。人の目の高さに合うように描かれていています。



第2図 墳丘実測図(※報告書より)



第3図 石室実測図(※報告書より)



石室前面より



奥壁



装飾部(拡大)





II 背振山南麓の装飾古墳

背振山南麓地域には、銚子塚古墳に代表される初期古墳が多く見られます。現在3基の装飾古墳が見られ、特に佐賀市内にある西原古墳と西隈古墳は石棺系の装飾古墳であり、福岡県の石人山古墳との関連が注目されます。一方、伊勢塚古墳は奥壁に描かれた人物を中心とした物語性から筑後川流域の装飾古墳との系譜が注目されます。

佐賀市の装飾古墳

佐賀市は佐賀平野の中心に位置し、北には脊振山地を望み、南には有明海が広がる肥沃な地にあり、弥生時代より政治的・文化的な中心地として栄えてきたところです。

佐賀市内には現在2基の石棺系装飾古墳が知られています。

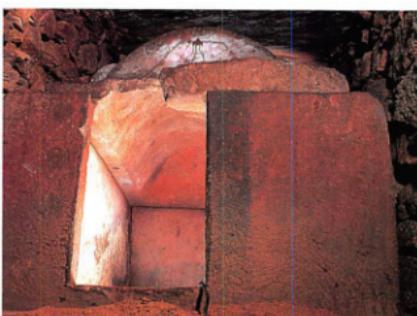
西隈古墳 佐賀市金立町大字金立 2936番地

脊振山南麓から伸びる低丘陵に位置する直径約30メートル、高さ約4メートルの円墳で、2段築成と報告されています。時期を特定する遺物が出土していませんが、石棺の構造から5世紀末ごろに建造されたものと考えられています。

内部の埋葬施設は横穴式石室で、玄室に横口式の家形石棺が納められています。玄室長3.3メートル、幅1.5メートル、高さ1.7メートルを測り、玄室内部に赤色顔料が塗られています。

石棺は、阿蘇溶結凝灰岩製で縦長2メートル、幅1.1メートル、高さ1.3メートルを測ります。表と蓋の裏側にも赤色顔料が塗られています。

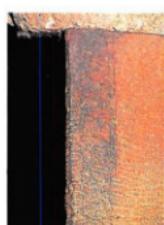
石棺の装飾は、棺身と棺蓋玄門側小口面にコンバス状の工具で円文と連続三角文が描かれています。



石棺全景



石棺蓋部分



石棺右部分



にしづき
西原古墳 佐賀市金立町大字金立

脊振山系南麓からのがる低丘陵に位置します。前方後円墳であったと考えられていますが、現在は墳丘が消失しており確認が出来ません。ここからは石製表飾品が出土しています。

西隈古墳同様、5世紀末ごろに築造されたと考えられます。

古墳内部には横穴式石室が築かれ玄室に横口式の家形石棺が納められています。

装飾は三角文、方形文、同心円文等が線刻で描かれていたと報告されています。



西原古墳出土 石製表飾遺物（表）



西原古墳 石製表飾遺物（裏）



神埼町の装飾古墳

くにんぐち
神埼町は佐賀県の東部、脊振山地を北に望み、中心部を城原川が流れています。筑後川流域に含まれるこの地域は古くより、北部九州との密接な関係があります。

いせづか 伊勢塚古墳 神埼町志波屋 2003-3

こうしきせいだんきゅう
脊振山南麓の洪積世段丘上に築かれて
います。

古墳の全長は78.4メートル、前方部幅28メートル、後円部径高さ約7メートル、前方部の高さ約5メートルを測ります。

石室の全長は16.7メートルで玄室長3.8メートル、幅3.2メートル、高さ約4メートルです。羨道部が14メートルを超える長い羨道部が特徴的です。

装飾は奥壁に描かれています。現在かなり退色しておりますが、僅かに赤色顔料が残るにすぎませんが、奥壁右上面に円文がわずかに見られます。

あんとうはにわ 本古墳からは、円筒埴輪や人物埴輪、
むとう すゑう 土師器、須恵器等が出土しており、6世紀後半に築造されたと考えられます。



伊勢塚古墳を上空から見た図



円筒埴輪



玄室奥壁



人物埴輪 頭部





III 天山山系の装飾古墳

天山山系では、嘉瀬川流域の多久盆地を望む丘陵縁辺部に11基の装飾古墳が見られます。

この地域の装飾古墳は格子文と斜格子文を線刻で描く事例が多く見られますが、一部の古墳では、動物や舟を題材に取り上げています。

多久市の装飾古墳

多久市は佐賀県のほぼ中央部に位置し、四方を山に囲まれた盆地状の地形です。北に天山を望み、南の両子山と鏡山の間にのみ僅かに開かれています。牛津川が市街地のほぼ中央を流れています。

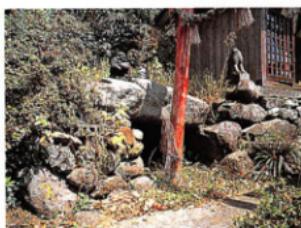
この地で装飾古墳は後期に集中して造られています。石室の形態や装飾の技法から、隣接する杵島郡や小城郡の装飾古墳との結び付きが強かったようです。

北坊古墳 多久市東多久町大字納所字三ノ北坊

両子山の東、多久川を望む微高地に立地しています。

古墳の規模は直径約12.5メートルの円墳で、石室の全長は7.2メートルを測ります。

漢道部から見て玄室の左側壁には、帆を持つ舟が描かれています。また、右側壁には、鹿あるいは鳥が対面するように描かれています。(註1)



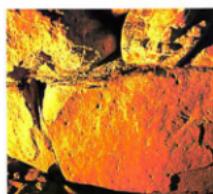
石室前面より



玄室右側壁



玄室右側壁 S=1/6



玄室左側壁



玄室左側壁 S=1/6

あなたいし 六大师古墳 多久市東多久町屋柳瀬

両子山の北、東多久町を見下ろす皆木山の頂上付近に立地しています。

古墳の規模は直径約12メートル、高さ2.5メートルを測る円墳です。

石室は複室構造を持つ横穴式石室で全長は約8メートルを測ります。

装飾は前室の左側壁に放射状文が、玄室の奥壁近くの側壁に魚がいすれも線刻で施されています。玄室奥壁にも格子文があったとされていますが、現在では確認することはできません。(注1)



羨道部より

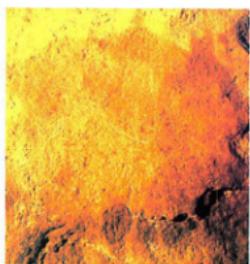


玄室右側壁



前室左側壁

S=1/15



前室左側壁



玄室右側壁

S=1/13



古賀山1号墳 多久市東多久町大字別府字古賀山

笠頭山の南、丘陵斜面に立地する円墳です。古墳の規模は直径約13メートル、高さ4メートルで、石室は複室構造を持つ横穴式石室で全長約5メートルを測ります。

装飾は玄室の奥壁に弧状文と斜格子文が線刻で施されています。

築造年代は出土した須恵器により6世紀末から7世紀初頭にかけて造られたと考えられます。



羨道部より



玄室奥壁

S=1/7

天山古墳 多久市東多久町大字納所字天山第1

両子山の北東、天山中に立地していたといわれます。

墳丘等の詳細は不明ですが、横穴式石室で、装飾は円文と舟が描かれていたとされています。

渋木1号墳 多久市東多久町大字別府字渋木

峰山の西南、丘陵の斜面に立地していたようです。

墳丘は消失しており、詳細は不明ですが、装飾は格子文があったといわれています。

やまと きえ
山の上ST014号墳 多久市東多久町大字別府字堤口

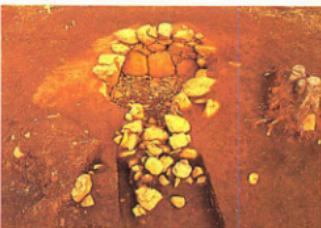
笠頭山の南東、上り山の南斜面に立地しています。総数で16基を数えます。このなかで14号墳にのみ装飾が施されていました。標高79メートルに築かれた14号墳は直径約8メートルを測る円墳で横穴式石室の玄室部分はほぼ正方形の平面プランで長さ2.3メートルを測ります。

装飾は玄室の奥壁腰石中央と左に格子文が線刻で施されています。また、袖石にも斜格子文と縱平行線文が確認されています。

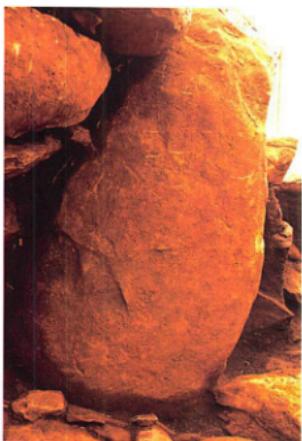
出土遺物から築造年代は古賀山1号墳と同じく6世紀末から7世紀初頭にかけて造られたと考えられます。



墳丘遠景



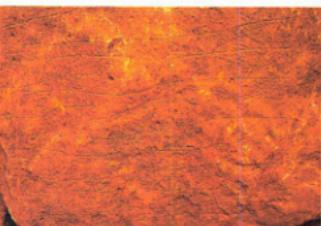
石室全景



左袖石側壁



奥壁腰石中央



奥壁腰石左側



小城町の装飾古墳

小城町は佐賀県のほぼ中央に位置し、北に天山を望み、南に平野部が広がる風光明媚な地として、また隣接する佐賀市のベッドタウンとして栄えています。小城町の装飾古墳は5基を数え、格子文を主体とするところから、杵島山系に属する文化圏にとりこまれていたものと考えられています。



第6図 天山山系の装飾古墳分布図

米ノ隈1号墳 小城郡小城町大字栗原字米ノ隈

峰山の東斜面に8基あり、1号墳に線刻が確認されています。

墳丘は現存径約11メートルの円墳で、高さ2.2メートルを測ります。

玄室の奥壁には斜格子文が、右側壁にも斜格子文が線刻で描かれています。他に人物が報告されています。（注2）



羨道部より



奥壁



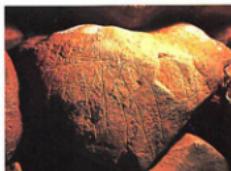
部位不明



部位不明



右側壁



部位不明

奥壁

S=1/6

第7図 米ノ隈1号墳石室の装飾





ひめ ご ざん 姫御前古墳 小城郡小城町大字池上字鏡籠

峰山の頂上付近にあります。

墳丘は径約25メートルの円墳で、高さ2.2メートルを測ります。

石室は玄室長さ約1.8メートル、羨道部8.3メートルを測り、長大な羨道部が特徴的です。

羨道部右側壁に鳥が描かれています。玄室の右側壁にも格子文が描かれています。

石室の構造などから6世紀後半頃に築造されたと考えられています。



羨道部より



さか い やま 坂井山1号墳 小城郡小城町大字栗原字坂井山

坂井山山頂から東南部に斜面にかけてあった古墳群ですが、みかん園造成のためにほとんどが消失し、この古墳も所在不明の状態にあります。

小城町史によると、装飾は玄室内に線刻で格子文や斜格子文があったことが記載されています。

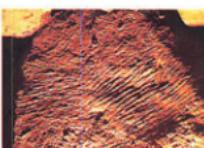
築造年代等は7世紀初頭と考えられています。

羨道部右側壁

S=1/13



部位不明



部位不明

へんざいてん 弁財天古墳 小城郡小城町大字栗原字二本榎

鏡山と坂井山の中間にある尾根一帯に存在していたと思われます。

小城町史によると、円墳で横穴式石室をもっていたとされ、装飾は玄室内の腰石に線刻で格子文や斜格子文があったことが記載されています。

ふわぞこもり うし お やまと 深底籠古墳（牛尾山古墳） 小城郡小城町大字栗原

牛尾山の北部山頂近くに築かれていましたが、みかん園造成のために破壊されてしまいました。小城町史によると、横穴式石室を持つ円墳であったようで、破壊された古墳の石材と思われるものに線刻で格子文を施したものが発見されましたが、石材は現在、所在不明となっています。





IV 杣島山山系の装飾古墳

杵島山山系では、北東丘陵縁辺部から有明海沿岸部にかけて13基の装飾古墳が見られます。

杵島山山系の勇猛山に集中して装飾古墳が造られており、装飾は格子文と斜格子文を線刻で描く事例が多く見られますが、一部の古墳では、動物や舟、木の葉等を題材に取り上げています。

武雄市の装飾古墳

武雄市は、佐賀県の西部に位置し、周りを山に囲まれた盆地です。市街地を六角川が流れ、杵島山山系によって、白石平野とは隔てられています。



第8図 杣島山山系の装飾古墳分布図

東福寺ST014号墳 武雄市橋町大字片白

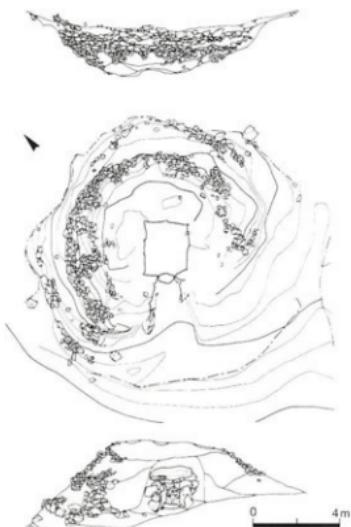
武雄盆地の東端、杵島山から延びる標高15～30メートルあまりの丘陵上に築かれています。

本古墳は径12.4メートル、高さ約5メートルの円墳で、横穴式石室の現存長は約5メートル、玄室長2.4メートル、幅2メートルを測ります。

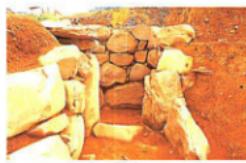
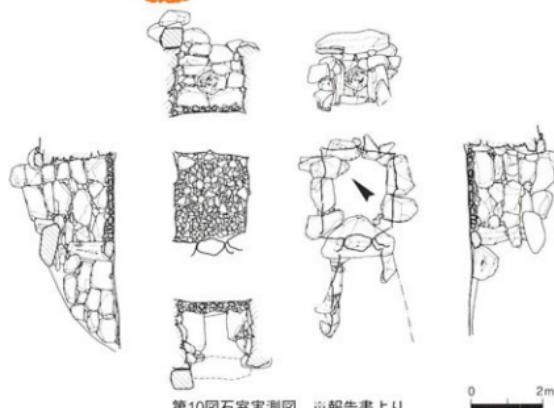
装飾は玄室の奥壁に明瞭ではない文様があり、右玄門裾石には木の葉文と格子文が、右渓道部側壁には格子文がそれぞれ線刻されています。

本古墳からは、多くの須恵器や鉄器、装身具類が出土しており、この古墳群中の盟主墳であったことが推測されます。

この石室形態と考え合わせて、6世紀末～7世紀初頭に造られたと考えられます。



第9図 墳丘実測図 ※報告書より



第11図 東福寺 S T O 14号墳の装飾



北方町の装飾古墳

北方町は武雄市と多久市に挟まれた山間の閑静な地で市街地を六角川が流れています。



第12図杵島山山系の装飾古墳分布図

勇猛山1号墳 杵島郡北方町大字大渡字芦原

杵島山地北東部に位置する勇猛山の東側にあり、1・4・5号墳に装飾が確認されています。

本古墳は直径約12メートル、石室の残存長は約4メートルを測ります。

玄室の側壁に線刻で装飾が施されていたと報告されています。

勇猛山4号墳 杵島郡北方町大字大渡字芦原

本古墳は直径約12メートル、石室の残存長は約8メートルを測ります。前方後円墳との指摘もありますが、現況では円墳と考えられます。装飾は玄室の7ヶ所で線刻が確認されます。格子文を主体にいくつかの文様で描かれています。

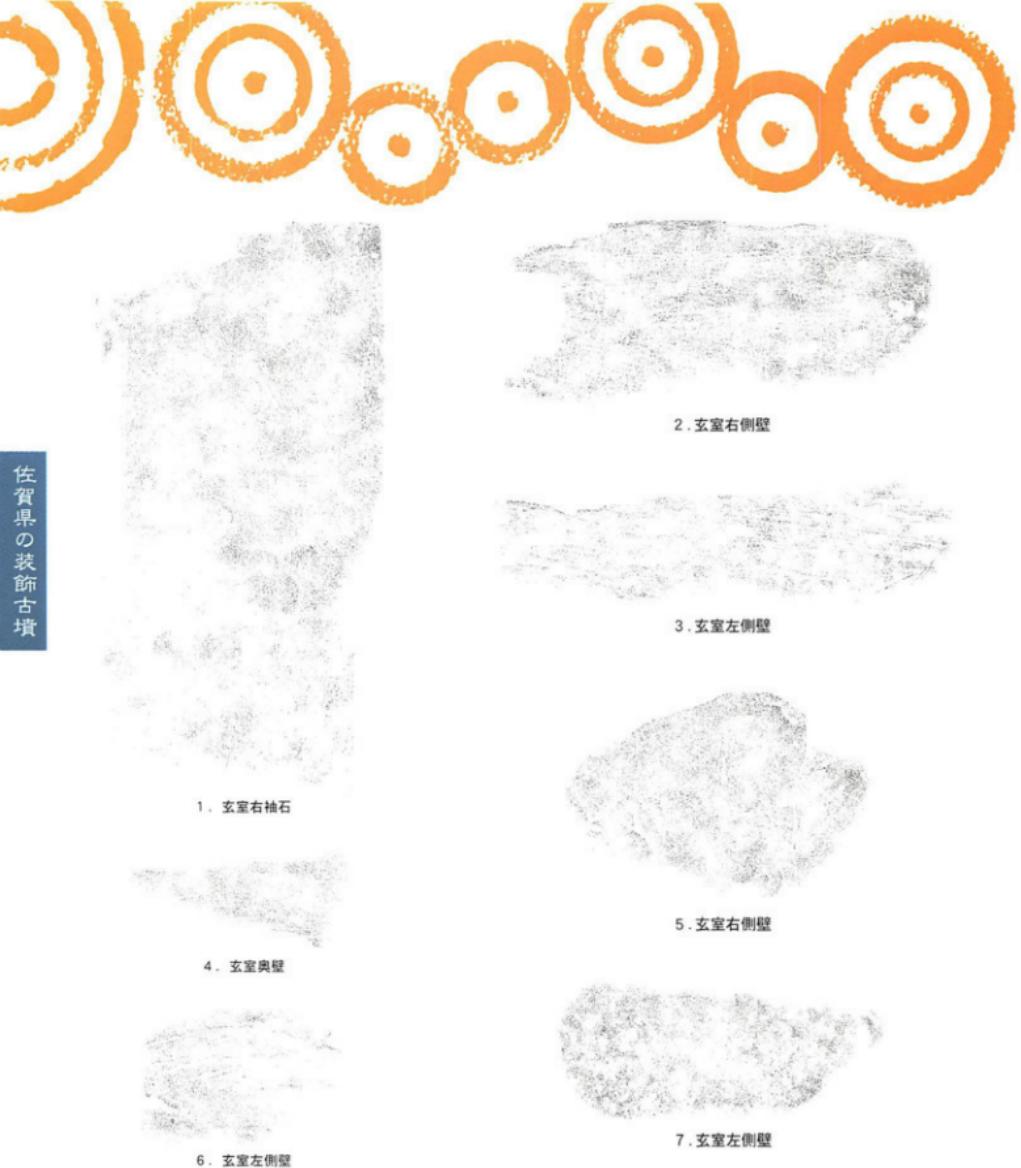


庚道部より



玄室右袖右





第13図 勇猛山4号墳の線刻拓本

(S=1/8)

いみょうさん 勇猛山5号墳

本古墳は直径約20メートル、石室の残存長は約4メートルを測ります。墳丘は確認されていません。
装飾は玄室の側壁に線刻で施されていたと報告されています。



いみょうじ
勇猛寺古墳 杵島郡北方町大字大渡字永池

本古墳は勇猛山古墳群中の1基です。その特徴はひとつの墳丘に3基の横穴式石室を持つことです。墳丘形状はよく分かっていません。

1号石室の現存長は約5メートルを測ります。装飾は玄室の左袖石に格子文が刻まれています。2号石室の現存長は約4メートルを測ります。装飾は玄室奥壁に家が、右側壁にゴンドラ形の舟と斜格子文が刻まれています。

3号石室の現存長は約3メートルを測ります。装飾は渓道部右側壁に人物が、玄室側壁に斜格子文が刻まれています。

石室に描かれたさまざまな文様で知られてれていますが、近年白石町で類似した人物画の線刻が確認されています。



1号石室



1号石室玄門装飾



2号石室



2号石室右侧壁



3号石室



3号石室渓道部右侧壁



2号石室奥壁

第14図 勇猛寺古墳群の装飾文様



ながいけ 永池古墳 杵島郡北方町大字芦原字永池

現在は永池溜め池の東岸、湖中に水没しています。渴水期にのみ見ることができます。

本古墳は円墳で直径約24メートルを測ります。

石室は複室構造を持つ横穴式石室で全長は約11.8メートル、羨道部の長さ約5.5メートル、玄室長約3.9メートル、幅約2.1メートルを測ります。

装飾は前室の閉塞石に使われていた石材から見つかっています。そこには、彌をささげ持った人物と1頭の動物が線刻で描かれています。

築造年代は7世紀後半と考えられます。



永池古墳遠景



石室羨道部より



閉塞石線刻画

みのくさき 箕具崎古墳群 杵島郡北方町大字大渡字一本松

白石町との境界線にまたがっています。杵島山東側丘陵突端の旧火葬場横にあります。3号墳と4号墳にそれぞれ装飾が施されています。



第15図箕具崎古墳群略図



箕具崎 3号墳

本古墳は前方後円墳で主体部は横穴式石室です。

(注3)

装飾は玄室側壁に6ヶ所認められました。格子文と斜格子文が主体で、他にいくつかの文様が刻まれています。

築造年代は石室の形から7世紀後半と考えられます。



墳丘狭道部より



玄室奥壁



玄室左側壁



玄室右側壁



玄室右側壁



玄室右側壁



玄室右側壁

(S=1/10)

第16図箕具崎 3号墳の線刻拓本



箕具崎 4 号墳

本古墳は円墳で主体部は横穴式石室です。
装飾は玄室左右側壁に 2ヶ所認められました。
いずれも格子文が刻まれています。
築造年代は 7世紀後半と考えられます。(注4)

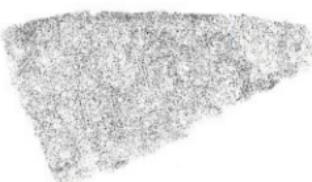


石室全景



玄室左側壁

S=1/10



玄室右側壁

S=1/10

第17図 箕具崎 4 号墳の線刻拓本



白石町の装飾古墳

白石町は杵島山地の南、六角川を境に豊かな水田地帯が広がるこの地で装飾古墳は3基確認されています。

妻山古墳群 杵島郡白石町大字馬洗字上黒木

杵島山地から東へ延びる丘陵上の南斜面、標高84メートルにあります。平成5年の調査で4号墳に装飾が発見されました。今回の企画展にあたり、再調査を白石町教育委員会へお願いしたところ、4号墳とは別丘陵に位置する6号墳と7号墳に新たに装飾が発見されました。この3基が杵島郡における格子文をはじめとする線刻による風習の解明に大きな資料として役立つものと思われます。

妻山4号墳

本古墳は直径約12メートル、高さ約3.5メートルを測ります。

石室は天井石がありませんが、全体の3分の2ほどが残っています。石室の残存長は約5メートルを測ります。床面に仕切りがみられます。

装飾は鉄製の釘状のもので、線刻を施しています。また16ヶ所にものぼる装飾は、格子文、斜格子文をはじめとして、船に乗る人物、馬、水にもぐる人物等、多彩多様です。勇猛寺古墳に描かれた人物の線刻と類似点が多く、関心が寄せられます。

出土遺物から6世紀後半に築造されたと考えられます。



第18回杵島山系の装飾古墳分布図



妻山古墳群遠景



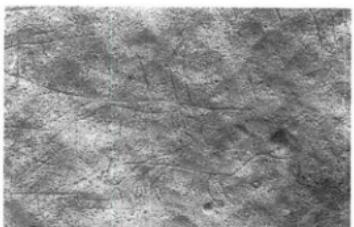
墳丘全景



1. 玄室東側壁



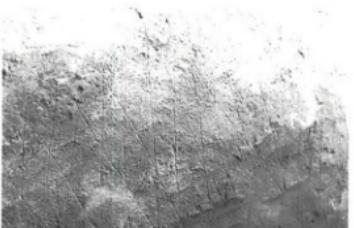
2. 玄室東側壁



3. 玄室東側壁



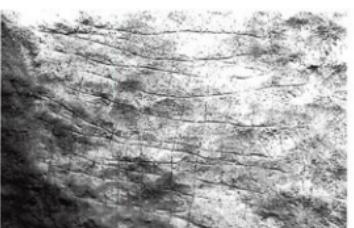
4. 玄室東側壁



5. 玄室西側壁



6. 奥壁



7. 奥壁

第19回妻山4号墳の線刻文様



高杯



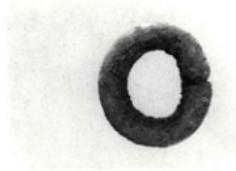
提瓶



金銅装太刀



金銅製圭頭太刀柄頭



耳環

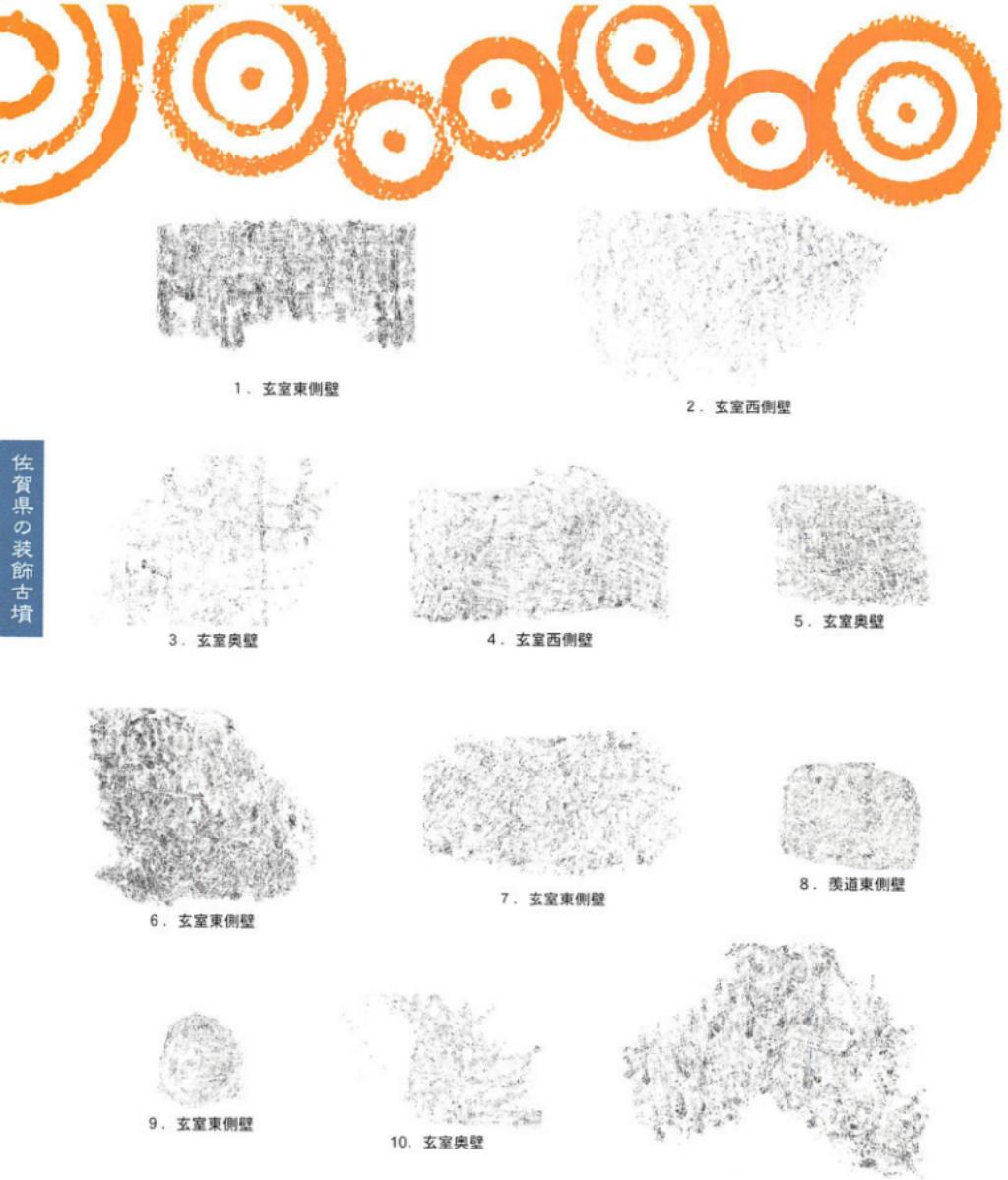


銅鏡



装身具（管王・勾玉）

第20図妻山4号墳出土遺物



第21図妻山4号墳の線刻拓本

(S=1/14)

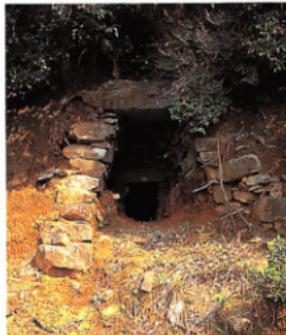


妻山6号墳

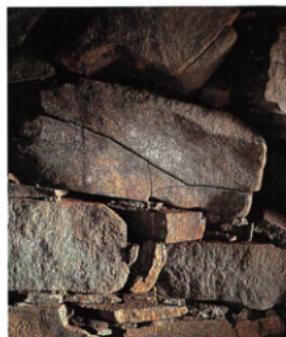
本古墳は正式な調査が行われていないため詳細なデータはありません。羨道部がすでに壊されており、玄室のみが残存しています。玄室右側壁に格子文が描かれています。



玄室右側壁



石室正面より



玄室右側壁

妻山7号墳

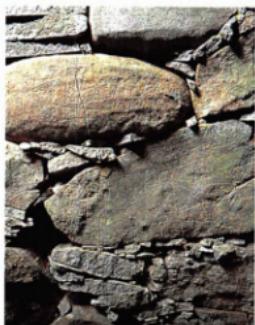
天井石が取り外されており、また羨道部は埋まっているため、全容はよく分かりません。この古墳の特徴は、石室がT字形に作られており、類似するものとして対馬の矢立2号墳があげられ、両古墳における、当時の交流を考えさせる例として注目されます。

石室の奥行き1.4メートル、幅3.5メートル、高さ2.8メートルを測ります。

装飾は、石室全体に11ヶ所認められ、連続
楕円状文、連続三角文、格子文、斜格子文、斜
平行線等があります。



石室天井部より



1. 玄室奥壁



2. 玄室前壁



3. 玄室奥壁



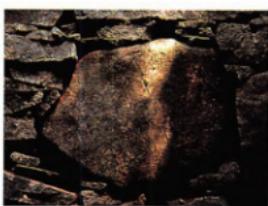
4. 玄室奥壁



5. 玄室奥壁



6. 玄室前壁



7. 玄室奥壁



8. 玄室右側壁



9. 玄室前壁



10. 玄室前壁



11. 玄室右側壁

第22図妻山7号墳の線刻文様



1. 玄室奥壁



5. 玄室奥壁



2. 玄室奥壁



6. 玄室奥壁



7. 玄室前壁



3. 玄室右側壁



8. 玄室右側壁



4. 玄室前壁



9. 玄室前壁

(S=1/8)

第23回妻山7号墳線刻拓本

湯崎2号墳 杵島郡白石町大字湯崎 1862

本古墳は陽興寺近く杵島山地中腹の標高7.0メートルの丘陵部にあります。

円墳で主体部は横穴式石室です。

天井部が崩壊し、石室内部も悪戯書きによる損傷が著しく、かつて株石に線刻で「船」が描かれていたと報告されていますが、今回は確認できませんでした。また湯崎古墳群の近辺から斜格子文が刻まれた石材が見つかっています。(注5)



石室正面より

有明町の装飾古墳

有明町は、有明海を望む干拓の町です。有明平野の中を廻り江川が流れ、豊かな水田が広がりを見せています。海と平野からもたらされる産物によって古来より栄えてきた城でもあります。

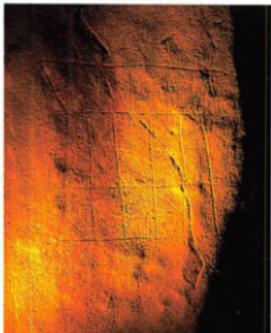
龍王崎6号墳 杵島郡有明町大字深浦 6032

海童神社背後の丘陵に分布する約20基に及ぶ古墳群中の内の6号墳に装飾が認められます。古墳の規模は直径20メートル、高さ約2.5メートルを測ります。

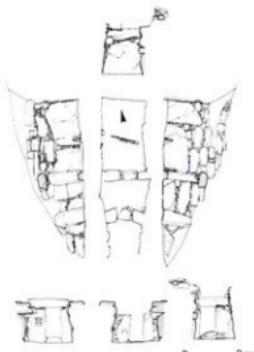
石室の全長は8.4メートルで玄室長3.8メートル、幅3.8メートルを測ります。

装飾は玄室の左袖石前面にのみ描かれています。線刻で家を描いており、他に類を見ない装飾です。

本古墳からは、数多くの副葬品が出土していますが、中でも装身具の豪華さは、他に類を見ないものです。



玄室左袖石



第24図龍王崎6号墳石室実測図



長崎県は、九州西端の半島と対馬、壱岐に代表される多くの島々から成り立ち、また県上の9割が山林等で占められ、平野部が少ないところとして知られています。

古くから、日本において大陸へ近いことから対外交渉の窓口として栄えてきました。

当県の装飾古墳は、有明海沿岸の一部を除くと、大半は壱岐に集中して分布しています。

I 有明海沿岸部の装飾古墳

有明海沿岸部の極限られた地域に3基の装飾古墳が造られています。装飾は、格子文と斜格子文を線刻で描いていますが、小長井町の長戸鬼塚古墳では、捕鯨の様子を描いたと考えられる線刻があり、壱岐の鬼屋塚古墳との関連が注目されます。

小長井町の装飾古墳

小長井町は、長崎県の南東部に位置し、平野部の少ない、漁港に恵まれた地です。

対岸の熊本とも非常に近いことから、関係の深い地域でもあります。



第25図 小長井町の装飾古墳分布図

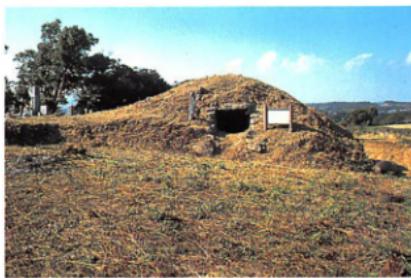
長戸鬼塚古墳 北高来郡小長井町小川原浦名8361

長戸鬼塚古墳は小長井町の南東、有明海に突き出た丘陵の先端部に位置します。眼下には有明海が広がっています。

本古墳は標高19.5メートル、径17メートルの円墳です。

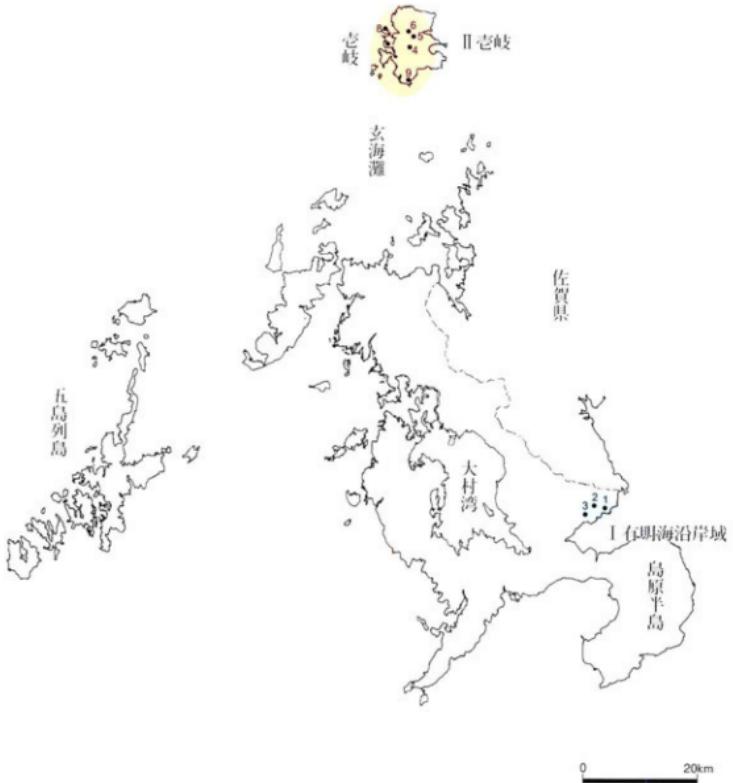
石室の現存長は11.3メートルで玄室長4.3メートル、幅2.5メートル、天井までの高さ3.2メートルを測ります。

装飾は玄室東（右）側壁腰石に連続三角文が線刻で描かれ、玄室西（左）側壁腰石に一艘の船と2頭の鯨、精円状文様が描かれています。



墳丘全景





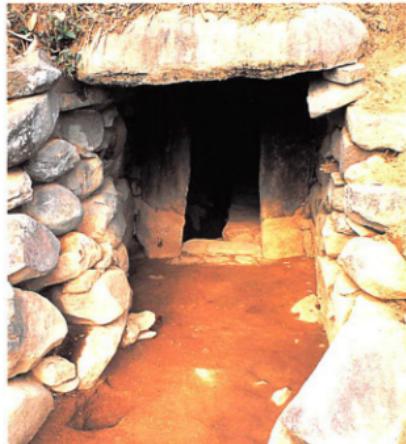
第26図長崎県の装飾古墳分布図

地名表	
1	長戸鬼塚古墳
2	丸尾古墳
3	善神山古墳
4	反六古墳
5	兵瀬古墳
6	百田町5号墳
7	鬼屋窪古墳
8	山ノ神蘿刻画
9	大米古墳



鯨の背には、直線が描かれ、捕鯨の様相を表したものと考えられています。

本古墳からは、整備調査にともなう調査で須恵器や土師器などが出土し、古墳時代終末期の7世紀後半の築造と考えられます。



玄室左側壁腰石



玄室左側壁腰石

玄室右側壁腰石

(S=1/9)

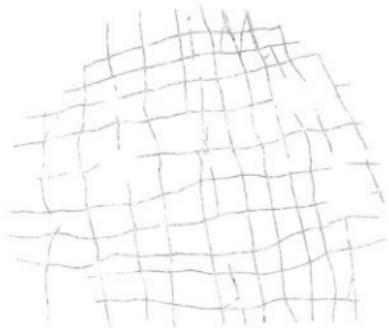
まるお 丸尾古墳 北高来郡小長井町牧名字丸尾

丸尾古墳は長戸鬼塚古墳から北西に400メートルあまり、小深川の右岸、標高約20メートルの丘陵の端部に位置します。眼下には入り江が広がっています。

本古墳の東側が抹石のため大きく削られ全体の形は不明瞭ですが、円墳と考えられます。

石室は東側が大きくえぐられているため、全体がはっきりしていませんが、单室構造と報告されています。

装飾は玄室奥壁一面に格子文が描かれています。



玄室西側壁



墳丘近景



玄室奥壁

第27図丸尾古墳線刻文様

(S=1/13)





高来町の装飾古墳

高来町は、長崎県の南東部に位置し、北の多良岳に連なる山系の麓にあたります。多良岳より流れ出す五つの水系は、平野部を潤しています。

善神さん古墳 北高来郡高来町湯江三部壱名字尾の上

善神さん古墳は湯江神社境内の緩やかな傾斜地にあります。

本古墳の墳丘は変形し、全容を知ることは出来ません。

石室は玄室のみが残っており現存長は2.3メートル、幅2.2メートルのほぼ正方形の平面プランをもちます。

装飾は玄室奥壁に線刻で斜格子文が描かれており、その上から人物と舟、動物が新たに刻まれている。同時期のものなのか、後世の追刻なのか見解に相違があります。（注6）

築造年代は、6世紀から7世紀初頭と報告されています。（注7）



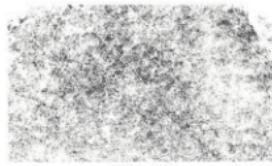
第28図高来町の装飾古墳分布図



善神さん古墳石室近景



玄室側壁



玄室側壁 S=1/5



玄室側壁 S=1/5

第29図善神さん古墳線刻文様拓本



II 壱岐の装飾古墳

大陸への玄関口であった壱岐では、島内に300基を越す古墳が造られています。その中の4基に装飾をもつ古墳が見られます。装飾は、舟を線刻で描いていますが、郷ノ浦町の鬼屋窟古墳では捕鯨の様子を描いたと考えられる線刻があり、小長井町の長戸鬼塚古墳との共通性が認められます。

郷ノ浦町の装飾古墳

郷ノ浦町は、壱岐の西海岸にあたり、良好な漁港を持ち、江戸時代は鯨漁でも栄えていました。町内の古墳にも舟と鯨の線刻が確認されています。

おにやくほ 鬼屋窟古墳 壱岐郡郷ノ浦町有安触 1517

玄海灘を望む、台地上に立地しています。墳丘は完全に流失しており、現在は石室が剥き出しの状態で残されています。

石室の現存長は約3.5メートルで幅1.5メートル、高さは約1.1メートルを測ります。

装飾は前室左側壁に舳先を南に向け、8本の櫂をつけた1艘の舟が描かれています。船の前方には鯨と考えられる大型の動物が描かれ、両者が1本の線で結ばれています。捕鯨の様子をあらわしたものと考えられます。この線刻の下には、さらに2艘の船が描かれています。

右袖石には、帆を立て、櫂を突き出した舟が描かれていたようですが、現在では肉眼では判別できません。

本古墳からは、須恵器の長頸壺と杯が出土しています。

出土遺物から7世紀頃の築造と考えられます。



第30図 壱岐の装飾古墳分布図



石室近景



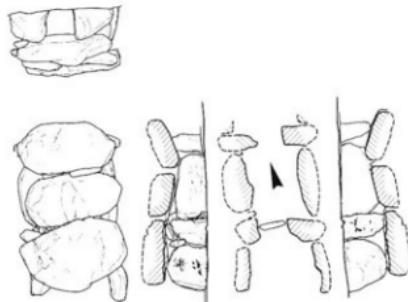
前室左側壁



長頸壺



杯（蓋・身）



第31図石室実測図（郷ノ浦町の文化財より転写）

**おおごめ
大米古墳 壱岐郡郷ノ浦町初山東触字大米 375**

玄海灘へ向かって延びる丘陵の上に立地しています。墳丘は西半分が流失しており、現在は石室西側が剥き出しの状態で残されています。

内部本体は複室構造の横穴式石室で全長は約8メートル、玄室長約2メートル、幅1.5メートル、高さは約2メートルを測ります。

装飾は前室の左側壁に線刻で帆のある舟が描かれています。

出土品がなく、築造時期は不明です。



石室近景



前室左側壁



前室左側壁

S=1/5

やま かみ
山ノ神線刻画 壱岐郡郷ノ浦町新田触

玄海灘を見下ろす丘陵上に立地します。石材のみが畠に残されていますが、開田に際して、近くの古墳を取り壊したとの話もあり、古墳の石室の石材と考えられます。(注8)

装飾は前室の左側壁に線刻でたくさんの櫂を持つ舟が描かれています。



遠景



石材近景



石材近景（拡大）



石材装飾部分

S=1/3



勝本町の装飾古墳

勝本町は、考古学上で著名なカラカミ遺跡を持つ多くの遺跡が集中する地域でもあります。ここには1基の装飾古墳が発見されています。

双六古墳 壱岐郡勝本町立石東触字双六 80・81・82他

島内中央部の緩やかな丘陵上に立地しています。

全長約53メートル高さ約5メートルを測ります。

石室は横穴式石室で、その現存長は約11メートルで玄室長約3.3メートル、幅2.7メートルを測ります。

装飾は玄室の右側壁に帆と舵をもった舟が線刻によって描かれています。

出土品や、石室の形から6世紀の築造と考えられます。(注9)



第33図石室正面より



第32図双六古墳墳丘測量図

0 1 20m



芦辺町の装飾古墳

芦辺町は、壱岐の中心部を町内に持ち古代から中枢部であったと考えられます。国分本村の地名のごとく多くの古墳が集中する地域でもあります。ここには2基の装飾古墳が発見されています。

ひょうぎ 兵瀬古墳 壱岐郡芦辺町国分本村字兵瀬 903

島内中央部の緩やかな丘陵上に立地しています。墳丘の残りかたから円墳と推定されます。

石室は3室からなる構造を持つ横穴式石室で、その現存長は約13メートルで玄室長約2.9メートル、幅2.6メートル、高さは約2.7メートルを測ります。

装飾は前室の右側壁に帆と舵をもった舟が線刻によって描かれています。

出土品がありませんが、石室の形から7世紀の築造と考えられます。



石室正面より



前室右側壁

第34図壱岐の装飾古墳分布図



前室右側壁 S=1/9

ひゃくたがしら 百田頭5号墳 壱岐郡芦辺町国分本村字盤屋ノ森 115

島内中央部の緩やかな丘陵上に立地しています。墳丘の残りかたから径10メートルほどの円墳と考えられます。

石室は複室構造を持つ横穴式石室で、その現存長は約6.3メートルで玄室長約2.4メートル、幅1.8



メートル、高さは約2メートルを測ります。

装飾はもともと漢道部側壁の一部と考えられます。帆と舵をもった舟が2艘、線刻によって描かれています。帆の形が両者とも違っています。舟の構造の違いが分かる貴重な資料です。

この古墳の築造時期等は不明です。



石室正面より



側壁（左）



側壁（右）



側壁（左） S=1/8



側壁（右） S=1/8

(注1) 「多久の歴史と文化」～ふるさとめぐり～に記載あり

(注2) 小城町史による。

(注3) 前方後円墳集成では5号墳として紹介されている。

(注4) 古墳番号が混乱しているため、白石町及び北方町、熊本県立装飾古墳館立会いで、現地踏査を行い、新たに番号付けをおこなっている。

(注5) 白石町史による。掲載された石材は現在所在不明となっている。

(注6) 扱筆者は現地調査と水池古墳との類似性から、本古墳に伴うものと考える。

(注7) 高来町史による。

(注8) 地元郷土史家による。

(注9) 5世紀に築造されたとの考えもある。



西北九州の装飾古墳文化をめぐって

佐賀県

佐賀県内の装飾古墳は、四つの地域にまとまった分布が認められました。最も東部に当たる筑後川流域では、鳥栖市の田代太田古墳に代表される壁画系の装飾古墳が6世紀後半に造られます。

次に、背振山南麓では、佐賀市において西隈古墳と西原古墳の石棺に浮き彫りで円文等の装飾が施されています。両古墳とも5世紀末～6世紀初頭にかけて造られており、福岡県の石人山古墳とはほぼ同時期と考えられます。6世紀後半に造られた神埼町の伊勢塚古墳に奥壁に彩色で装飾が施されており壁画系の装飾古墳として知られています。

佐賀県中部の天山山系では、彩色を用いた線刻で装飾を施す装飾古墳が造られます。主な装飾は格子文と斜格子文で玄室壁面に描かれる例が多く見られます。この他に、鳥や魚、舟等も題材に取り上げられています。

天山山系の南、杵島山系でも、同様の傾向が見られます。なかでも、北方町の勇猛寺古墳や白石町の妻山4号墳に描かれた装飾は人物や舟などの写実的なものを題材に選んでおり、単に呪術的な意味合いでだけで施されたものではないと考えられます。

このように、佐賀県においては、壁画系と線刻系の装飾古墳に大きく分けられます。そのうち線刻系の装飾古墳に描かれた格子文と斜格子文は、肥後の石障系装飾古墳に表された直弧文の簡略された形とも考えられます。

長崎県

長崎県内の装飾古墳は、大きく二つの地域にまとまった分布が認められました。有明海沿岸部に当たる地域では、3基が確認されています。小長井町の丸尾古墳と高来町の善神さん古墳は6世紀末～7世紀初頭にかけて造られた古墳で、いずれも格子文を主体に線刻で描いています。また長戸鬼塚古墳はやや遅れて7世紀後半に造られた古墳ですが、捕鯨の様子が線刻で描かれており、当時の漁業について知る貴重な資料です。

一方、壱岐島内では、300基を超す古墳が造られており、そのなかの4基に装飾が確認されています。その特徴は、石室の前室や漢道部側壁に、前後に三角の帆を持つ舟や一本の帆柱に方形の帆を持つ舟等が描かれていることです。

このように、長崎県では、一部杵島山系の線刻系装飾古墳に連なるもの以外は、いずれも、舟を題材にした装飾に限られていて、しかも筑後川や菊池川流域の装飾古墳に多く見られる舟の絵、すなわち死後の世界観を表現したものとは異なり、往時の生活そのものを表したものと考えられます。それは、この地域の人々が、海上交易あるいは漁業など、海との深いかかわりをもっていたことを示すものに他なりません。

参考文献

文献名	編集者	発行者(発行所)	発行年
『勇猛山古墳群』	佐賀県教育局社会教育課	佐賀県教育委員会	1967年1月31日
『長崎・丸尾古墳』	長崎県教育委員会	長崎県教育委員会	1972年
『長崎県立美術博物館研究紀要第1号』	長崎県立美術博物館	長崎県立美術博物館	1973年3月27日
『小城の歴史15号』	木下功		1973年4月30日
『小城町史』	小城町史編集委員会	小城町	1974年3月31日
『古代太田古墳調査及び保存工事報告書』	鳥栖市教育委員会	鳥栖市教育委員会	1976年10月31日
『郷ノ浦町の古墳』	九州大学文学部考古学研究室 壱岐国研究会	壱岐郷土館	1981年3月31日
『壱岐15号』	壱岐史蹟顕彰会	壱岐史蹟顕彰会	1981年12月1日
『研究収録第25集』	純心女子短期大学社会科		1982年
『北方町史』	北方町史編さん委員会	北方町	1985年3月1日
『高来町史』	高来町	高来町	1987年3月1日
『山の上古墳群』	佐賀県教育委員会	佐賀県教育委員会	1987年3月
『長崎県の歴史散歩』	長崎県高等学校 教育研究会社会科部会	山川出版	1989年4月20日
『日本の古代遺跡42長崎』	企画 森浩一 著者 正林護	保育社	1989年10月31日
『鬼の窟古墳』	長崎県教育委員会 芦辺町教育委員会	芦辺町教育委員会	1990年3月
『佐賀市の文化財』	佐賀市教育委員会社会教育課	佐賀市教育委員会	1991年3月31日
『郷ノ浦町の文化財』	壱岐郷土館 郷ノ浦町教育委員会	壱岐郷土館	1992年3月31日
『県内古墳詳細分布 調査報告書』	長崎県教育委員会	長崎県教育委員会	1992年3月31日
『黒谷水呑古墳群』	佐賀県教育委員会	佐賀県教育委員会	1993年3月28日
『東福寺遺跡』	佐賀県教育委員会	佐賀県教育委員会	1994年3月31日
『基山古墳群4号墳』	白石町教育委員会	白石町教育委員会	1994年3月31日
『龍王崎古墳群』	有明町教育委員会	有明町教育委員会	1994年3月
『佐賀県の文化財』	佐賀県教育委員会	佐賀新聞社	1994年3月31日
『装飾古墳が語るもの』	国立歴史民俗博物館	吉川弘文館	1995年7月10日
『佐賀考古第3号』	佐賀考古談話会		1995年12月
『考古学ジャーナルNo.395』			1995年
『歴史信託の参考資料編1』	長崎県教育委員会 文化課埋蔵文化財班	長崎県教育委員会	1996年3月
『国説長崎県の歴史』	外山幹夫	河出書房	1996年10月1日
『ヒヤーガンサン古墳』	現地説明会資料	佐賀県教育委員会	1998年

出展資料一覧

No.	出展資料	遺跡名	出土地	所有者(保管者)	指定の有無	点数
1	石製表飾遺物	西原古墳	佐賀市本庄町	佐賀市教育委員会	県指定	1
2	線刻人物閉塞石	水池古墳	北方町芦原	佐賀県立博物館	未指定	1
3	装身具一括 馬具一括 須恵器一括 土師器一括 金銅製冠帽 鉄鎌 鉄斧 刀子 鉄矛 挂甲片 金銅製鏡	龍王崎6号墳	有明町深浦	有明町教委	県指定	131
4	須恵器一括 玉類一式 鉄器類一括	山の上STO14号墳	多久市東多久町	多久市教委	未指定	6
5	人物埴輪 円筒埴輪	伊勢塚古墳	神埼町志波屋	個人蔵	未指定	1
6	須恵器一括 土師器一括 鉄鎌 刀子 金銅製鏡	黒谷2号墳	基山町宮浦	佐賀県教委	未指定	5
7	馬具一括 装身具一括(玉類) 肩鏡 挂甲 埴輪 須恵器類一括	石塚古墳	諸富町為重	佐賀県立博物館	県重文	14
8	刀類一括 装身具一括 須恵器一括	妻山4号墳	白石町馬洗	白石町教委	未指定	3
9	須恵器一括 鉄器一括 玉類一式	東福寺STO14号墳		武雄市	未指定	5
10	須恵器 須恵器	鬼屋窪古墳	郷ノ浦町有安町 郷ノ浦町安良	壱岐郷土館 壱岐商業高校	未指定 未指定	1 1
11	須恵器	从六古墳	勝本町立石東町	勝本町役場	未指定	3

協力機関・協力者(順不同・敬称略)

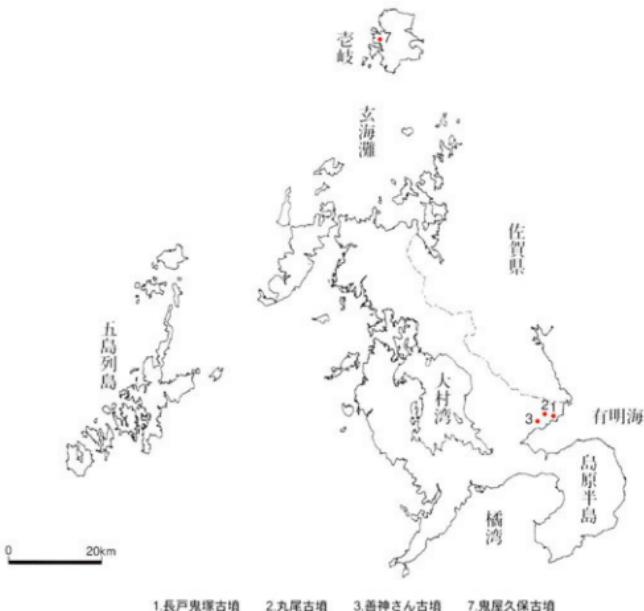
佐賀県教育委員会	長崎県教育委員会	佐賀市教育委員会	島原市教育委員会	多久市教育委員会
武雄市教育委員会	神埼町教育委員会	北方町教育委員会	小城町教育委員会	有明町教育委員会
白石町教育委員会	小長井町教育委員会	高来町教育委員会	勝本町教育委員会	勝本町役場
郷ノ浦町教育委員会	壱岐郷土館	壱岐商業高校	芦辺町教育委員会	
原の辻遺跡調査事務所	佐賀県立美術館・博物館	吉野ヶ里遺跡調査事務所		

福田 義彦	本島 健治	古庄 秀樹	木下 功	中平田賢治	高塚 啓介	岩永 雅彦	古賀 满宏
岩永 信秀	百崎 正子	藤瀬 植博	島 孝寿	樋渡 拓也	内野 武	田平 徳栄	福井 尚寿
西田 敏哉	加田 隆志	田川 球	須藤 賢隆	中須賀真美	松永 泰彦	白石 純吾	田上 久男
中村 春幸	中村 幸	田中 長	白木原 宣	野本 政宏	川道 寛	松尾 吉高	



付 論

国立水産大学校 助教授 立平 進



1.長戸鬼理古墳 2.九尾古墳 3.善神さん古墳 7.鬼屋久保古墳

1.はじめに

古墳時代の信仰的な諸現象について、考古学だけで解決できない課題も多く、隣接分野の成果が応用されることがある。民族学や民俗学及び民具学では、わずかな例でも決定的な解明の契機となる場合があり、本稿でも、装飾古墳の絵画について、民俗学などの成果を援用しながら、長崎県の例をもとに、その解明を試みたものである。

また、古墳についての考え方であるが、高塚の墳墓が盛んになり、墓域が区切られるようになるのは、弥生時代にその萌芽が見られるが、その様相は古墳時代になると決定的である。縄文時代に、先祖を埋葬したその上で、あるいは埋葬地と隣接した場所で日常の生活をする人々とは異なった考え方を持っていたともいえるのである。このような事例に対して、その背景には墓域を区切る人々とは異なる社会観や世界観があったに相違ないと考えるのである。

特に、熊本県では葬地としての横穴古墳などがあり、装飾古墳と呼ばれるものの中でも特異な在り方を見せてているのは、民族学・民俗学からもたいへん興味をそそられるものである。

そして、このような考え方は時代概念を区切るほど重要なものであるにもかかわらず、学界で一致した理解に達しているとは言い難い部分も残っており、新しい展開を期待する一助としたいとするものである。



2、長崎県の装飾古墳

長崎県の装飾古墳については、それほど研究が進んでいるという現状ではない。それというのも研究対象となる遺跡が少ないことが最大の原因である。古墳自体は、県内では、対馬・壱岐・平戸市周辺（湯牟田古墳群）・大村湾東岸・長崎市牧島（曲崎古墳群）などと、地域がかなり限定される特性がある。しかし、装飾古墳に至っては、数えるほどしか存在しないのである。その主なものを挙げると、次のようなところである。

- ・壱岐郡郷ノ浦町所在 鬼屋久保古墳
- ・北高来郡高来町所在 善神さん古墳
- ・北高来郡小長井町所在 長門鬼塚古墳
- ・北高来郡小長井町所在 丸尾古墳



丸尾古墳近景

これらの古墳については、それほど研究の手が加えられていないが、有明海沿岸域で、特色のある文様を特定した研究が見られる。垣中伊都子氏による「装飾古墳における文様構成の問題」（純心女子短期大学『研究集録』第25集、1982）

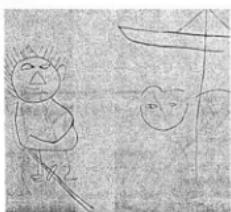
である。この論考には「特に線刻斜め格子紋様について」というサブタイトルが付されており、斜め格子文様が有明海沿岸域に分布することを明らかにしている。その内容の要旨を一部紹介したい。「長崎県の本土側に位置する装飾古墳三基の共通の文様として著れた斜め格子文様を他県にさがすと、ごくわずかではあるが佐賀県と熊本県に数基づつ類例をみることが出来る。



善神さん古墳近景



善神さん古墳側壁



善神さん古墳壁画(下川達也模写)

佐賀県では多久市の古賀山古墳四号墳、小城郡の米の隅古墳、杵島郡北方町の永池古墳と勇猛寺古墳二号墳、勇猛寺古墳四号墳の五基の類例があり、熊本県では玉名市のナギノ横穴群の六号横穴、山鹿市の鍋田

横穴群の四十九号横穴、五十号横穴、五十三号横穴と塚原の石の室古墳と五基の類例がある。」（同書）と記す。

その要旨であるが、「考察」として、次のように結論づけている。

「数十種類もの装飾古墳の文様の中で、斜め格子文様は全国的には長崎県、佐賀県、熊本県の環有明海沿岸に分布するが、その分布も各ブロックで集中的な傾向を示している。これらが有明海沿岸部に分布圏を形成するということは、ひとつの地域的なまとまりをもつものとして眺められ、そこには社会生活環境を反映した古墳構築者集団の存在が考えられる。一略ー



一般に斜め格子文様と総称されるもので、各地の斜め格子文様を詳細にみていくと、A型斜め格子文様といった、定規を使用しないまでも、右上から左下へ左上から右下へと、ほぼ規則的な交差により、中心部に菱形を連続させ、1個の壁石一面に施す形式のものと、B型斜め格子文様を形成し、壁石の一部に部分的に施す形式のものと二種類に分類することが出来る。また、このA型斜め格子文様とB型斜め格子文様とにおいては、古墳の所在地が近距離のものに同じ型の斜め格子文様が施されているとはかぎらず、細分類においての分布の特性はあらわれない。」（同書）としている。

それでも、斜め格子文様の特異性は指摘できることであり、類似する菱形文様や三角文様とは異なる文様であることを主張している。

さらに、次のように記している。

「装飾古墳の中でも特異な存在を示す斜め格子文様は、七世紀に環有明海の葬送観念を共にした古墳築造者集団のあいだに流行した一文様であったと想定できる。」（同書）としているのである。

この文様については、類似も少ないと、この地域の特色を示すものと認めた。さらに今後の類例をまって、関係者には注意を喚起できるものといえる。

3、装飾古墳の絵画

わずかではあるが、長崎県とその隣接地に、古墳の石室の壁面に「鯨や魚類・船など」の線刻画が描かれている例が報告されている。次にあげる三ヶ所である。

- ・長崎県北高来郡小長井町所在長戸鬼塚古墳
- ・長崎県壱岐郡郷ノ浦町所在鬼屋久保古墳
- ・熊本県玉名市石貫古城横穴古墳

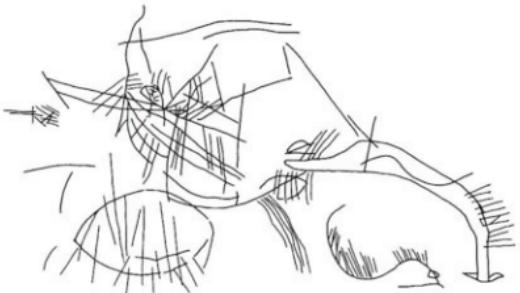
●鯨の線刻画[長戸鬼塚古墳]

長戸鬼塚古墳の鯨の図は明瞭に描かれている。尻尾がTの字形に描かれており、古くから撞木と呼ばれる形をしているものである。これが今までの魚の線刻画とはまったく異なる点である。筆者が、これを鯨と断定した根拠は、尻尾がTの字形をしているところであった。それまでに、考古学的な資料の魚の絵はかなり多く見てきたつもりであるが、これだけは異なっていたのである（シムモクザメというのもあるが）。鯨は尻尾がTの字形をしているのが特徴である。

絵は、鯨の頭部が平たく、長い胴部が尾部で内側に曲がり、何本もの鈎が突き刺さっている情景が描かれている。その鈎も頭部と背尾部へ集中的に刺さり、胴部の一部には綱を打たれたと思われる線も見られる。これだけ説明できることは、古墳時代のものとしては写実的な絵といえるのではないだろうか。

この絵の鯨の姿からは、鼻先が曲がっているところから小型のハクジラ類かもしれないが、全体の姿勢からはナガスクジラのようにも見られる。しかし、有明海の最奥に入ってくる鯨が果たしてあるだろうか、ましてやナガスクジラは大型の鯨である。多くの疑問が残るところである。





長戸鬼塚古墳 前室腰石部の線刻画実測図



長戸鬼塚古墳 墳丘全景



長戸鬼塚古墳 玄室左側壁腰石

この長戸鬼塚古墳がある場所は有明海の最奥で、海岸に近い台地上に立地しているが、鯨どころかイルカさえあまり回遊してくるところではない。すぐ下の海は、潮が引くと何百メートルにもなる干潟の有明海である。なぜそのような場所の古墳に鯨の絵が描かれたのであろうか。それが珍しかったので描かれたとするのか、このことは問題になりそうである。

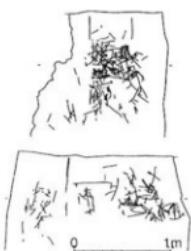
●鯨の線刻画[鬼屋久保古墳]

もう一例は、壱岐鬼屋久保古墳の捕鯨図である。描かれている魚体は二頭で、一頭には鈎が打ち込まれており、これを糧で漕ぎ追っている様子と思われるものである。ただし、この絵の魚体は、鯨というより魚的な表現に近く、絵を見るかぎりでは、イルカではないかと思わせるものである。頭部の表現からそれを強く感ずるし、二頭が並んで遊泳する姿は、イルカの習性を表しているとも思われる。イルカであれば、近海に回遊してくるカマイルカに姿がよく似ている。

壱岐の島は、江戸時代には鯨組が盛んに活動したところである。鯨の遊泳するルートに当たっていたともいえ、鯨が豊富に捕れる地域であった。イルカも近年まで捕獲したことはよく知られている。厳密な意味での検討は別にしても、大型の魚体を捕獲している様子と思われる。



鬼屋久保の捕鯨図



石貴横穴II-13号墓の捕鯨図



●鯨の線刻画「石貫古城II——13号横穴古墳」

この古墳では、何隻もの船が鯨を追っていると思われるが、線が入り込んでいて明瞭には分からぬ。それに、一隻の船に帆が上がっているのが認められ、かつて鯨漁では帆は使用されたことがないとの、この時代に帆船が存在することについては問題が残る。この帆船は、大型の帆船であるように見受けられるところからである。

しかし、長崎県の長戸鬼塚古墳とは有明海を挟んで見えるような位置関係にあり、有明海での鯨漁を考えるもう一つの例ということで貴重である。

鯨の絵を基に、やや詳しく記したが、考古学では、捕鯨の上限をかなり古く考えている研究者がいる。そこで、捕鯨が本格的に行われるようになった時に、「鯨組」という組織的に捕鯨を行う集団の様子を紹介して捕鯨の実態にせまり、比較を試みようとするものである。これも漁撈民俗学の一方法とご了解いただきたい。

4. 鯨組の陣容について

考古学的知見と比較してみる立場から、江戸時代の鯨組について、参考例として、次にその陣容を示した。

江戸時代、熊野地方や四国土佐、肥前西海を中心に鯨を組織的に捕獲する鯨組と呼ばれる大きな組織があった。元禄時代から1700年を前後する頃がもっとも盛んで、そこで働く人々の数は、当時の産業としては桁外れなものであった。筆者は、西海地域の捕鯨について調査研究を進めて来た者で、その地域を例に鯨組の陣容について記したい。

¹ 以前『西海のくじら捕り』という小冊子（平成7年）を出しているが、その中で鯨組について記した箇所がある。「鯨組の陣容」としたところである。

もっとも一般的なところで、『鯨史稿』(1808)を参考にすると、納屋場と沖場を合わせて、記録に残っている部分だけで386人の常雇いが必要であった。その内訳は、次の表のとおりである。なお、納屋場の人数はすべて役職者のことであり、この下で何人の人が働いていることを知る必要がある。

これらその他に雑役として、魚見の十数人や大工・鍛冶職・外科(医者)などが加わる。

また、鯨が揚がった日には、日雇い人夫の数は正確には把握できないほど多数になることが絵巻物などから推定できる。

写真に掲げるのは、浜に鯨を引き揚げて解体する「納屋場ニテ鯨捌之図」と呼ばれる場面のものである（『鯨魚鑑笑録』長崎県立美術博物館蔵）。この図には、約250人もの人が描かれており、一人として無駄な動きをしているものではなく、詳細に観察すると、絵全体が有機的に機能していることが見て取れるのである。大包丁で黒皮を切り、カクラサン（巻き揚げ機）に綱を着け剥ぎ取っている様子を示す。あたり一面が血の海となり、解体図のとおりに捌かれていく様子が分かる。

さらに納屋場の奥には、絵巻物でいえば、肉を分ける場所や骨を分ける場所のほか鯨油をとる部所があり、それぞれに約40人もの人が描かれているのである。そのような人数を合計していくと、700人以上になるわけである。



また、その数を補強する記録もある。『長崎県漁業誌全』(明治29年に編纂)によると、1組で513人が必要であったと記されているのである。これが長州捕鯨では、『長州捕鯨考』(徳見光三 1957)によると、「鯨組の業務従業員は諸役、鯨船乗組の総人員併せて七百四人、鯨船五十二隻を持つ陣容であり、(川尻浦鯨組)」と記されるものである²⁾。

ところで、西海地域の鯨組の最盛期には、現在の長崎県佐賀県を中心に73組もの鯨組が置かれていたと記録されているのである(『西海鯨観記』享保5)。これを単純に計算すると、1組を500人にして、70組では35,000人という、まさに巨大産業ともいえるものとなる。これに日雇いが加わるのであり、それぞれの家族のことを思うと経済的な波及効果は絶大なものがあったといえることになる。ただ、鯨組には、春浦と冬浦の別があり、全部の組が一時期に操業していたとはいわないまでも、それでも大きな数字である。

これらのことから考えて、単純に考古学的な知見とは比較できないにしろ、鯨組以前に積極的に捕鯨を行ったというのには程遠いような気がするのである。鯨漁の上限を古く求める考古学者もいるが、筆者は、積極的に鯨を捕獲したのは中世末期から近世始めの頃と考えている。それ以外に鯨を捕ったのは、「流れ鯨」とか「寄せ鯨」と呼ばれる、何かの原因があって海岸近くに打ち寄せられたものを捕獲していたと認めるのである。

以上は、装飾古墳の絵画から示唆を得て、かなり大きく穿った考え方も示してみたが、いずれも漁撈民俗学などの立場からの発言とご了承いただきたい。筆者は、考古学について深い関心を持っているが、多くの場合、民俗学・民具学的な立場から発言を行ってきた。しかし、いつも念頭にあるのは考古学のことである。流行言葉でいえば、学際研究であるかもしれないが、それぞれの研究分野からの興味も多様であったため、立場の異なるアプローチをしてきた嫌いもある。装飾古墳の線刻画についても、そのような漠然としたものから始まっている。関係各位にはご寛容をいただきたい。

注 1) 立平 進:西海のくじら捕り、長崎県労働金庫ブックレスト1、1995。

2) 徳見光三:長州捕鯨考、関門民芸会、1957。



※鯨魚鏡笑錄より転載(長崎県立美術博物館蔵)

参考文献

- ・島津義昭：鯨の考古学序説、九州歴史大学講座第7号、1992.
 - ・佐賀県立博物館：装飾古墳の壁画（図録）、1973.
 - ・川道寛他：長戸鬼塚古墳、小長井町教育委員会、1998.
 - ・立平 進：西海鯨鯢記、平戸市教育委員会、1980.
 - ・大槻清準：鯨史稿、江戸古典科学叢書・恒和出版、1808.
 - ・長崎県編纂：長崎県漁業誌（全）、1898.
 - ・橋本幸男：長崎県諫早市周辺の遺跡、長崎県立美術博物館研究紀要第1号、1972
- なお、引用文献や参考文献は本文中に記したものもある。

江戸時代の鯨組の陣容（役職と人数）

[納屋場]		[沖場]	
大別当（納屋総支配人）	1人	役羽差（番親父）	3人
別当（小納屋毎にあり）	3～4人	御戸親父（網打様）	1人
小部頭道具造りを兼ね（目付役）	1人	羽差見習い	不特定人
帳役（日雇世話役）	2人	役羽差	4人
魚店掛（切込指図役）	2人	若羽差	26人
釜掛（後口12人）	4人	水夫（追船13隻×12人）	156人
奥小部（薪世話役）	8人	双海船（6隻×12人）	72人
魚切親父（道具造りの指図役）	1人	双海船附船（6隻×12人）	72人
本魚切（浜で捌く役）	6人	持双船（4隻×12人）	48人
中切（浜で小切の役）	6人	各船には役船があり、役付きの4人が1人ずつ乗る。	
網指（網出納役）	2～4人		
飯炊（飯炊き役）	2～4人	合計 386人	
追廻（雑用）	2人		
火番（納屋掛りの役人）	2人	<『鯨史稿』(1808)による>	

平成10年度後期企画展

【全国の装飾古墳 4】

佐賀県・長崎県の装飾古墳

平成10年10月31日

編集・発行 熊本県立装飾古墳館

〒861-0561 熊本県鹿本郡鹿央町岩原3085
TEL 0968-36-2151 FAX 0968-36-2120

印刷・株式会社 有明印刷

〒865-0022 熊本県玉名市寺田123-1



熊本県立 装飾古墳館

この電子書籍は、熊本県立装飾古墳館 企画展図録 第11集を底本として作成しました。
閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、全国の歴史博物館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：佐賀県・長崎県の装飾古墳

発行：熊本県立装飾古墳館

〒861-0561 熊本県山鹿市鹿央町岩原 3085 番地

電話：0968-36-2151

URL：<http://kofunkan.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：西暦 2018 年 6 月 1 日